

聖書:列王記第二 4章1～7節

説教:家の中に何もありません

はじめに

皆さんの中には、深刻な問題に悩んでいたことがきっかけで教会に来るようになったという方がおられるでしょう。教会に来ると、では聖書を開きましょうということになり、こう書いてあるのを見つけるわけです。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」

そうか、神を信じさえすればすべての悩みは解決するにちがいない。そう思ってクリスチャンになった。そこまではよいのですが、信じたらすべて問題は解決したのでしょうか。解決したという方ももちろんいます。しかし、そうでない方もいます。それどころか、ますます問題が深刻になる方もいます。

今日の箇所もそうです。神を信じているのに、なぜこの女性は、こんなにひどい目にあうのでしょうか。こんなことなら信仰を持たない方がよいのではないか。そんな疑問さえ湧いてきます。今日はそのことを考えてまいります。

1 預言者の仲間（エリコの出来事）

1節を読みます。「預言者の仲間の妻の一人がエリシャに叫んで言った。『あなたのしもべである私の夫が死にました。ご存じのように、あなたのしもべは主を恐れていました。ところが、債権者が来て、私の二人の子どもを自分の奴隷にしようとしています。』」

このやもめの夫は、「預言者の仲間」であったとあります。また、「あなたのしもべ」であったとか、「主を恐れていました」とも言っていますから、以前からエリシャと深い関係があったようです。それで調べてみると、この「預言者の仲間」というフレーズは、実は2章15節のところにも出てきていました。

エリシャの先生であったエリヤが竜巻で天に上げられたあと、エリシャがヨルダン川の水を打ったら、それが左右に分かれるというできごとが起きました。エリコの町からやってきた預言者の仲間たちはそれを見て、エリシャを礼拝したと書いてあります。おそらくそのときから、このやもめの夫はエリシャのしもべになったと思われれます。

今日はこの箇所から三つの疑問に目を留めてまいります

2 疑問

1) その1：なぜ信仰者が苦しむのか

まず一つ目です。エリシャはそのあと、エリコの町に行き、流産を引き起こすほどに汚れていたエリコの水をきよめ、「もやは死も流産も起こらない」と語っていました。そこで考えるわけです。このやもめの二人の子どもは、いつ生まれたのだろうか。もしかして、この預言者の夫婦は、エリコの水が悪かったために、長年子どもが与えられず苦しんでいたのではないのでしょうか。それがあるとき、エリシャが水をきよめてくれたおかげで、二人の子どもを授かることになった。神を信じる喜びを、そんなふうに味わってきたのだらうと想像するのは。それがいま、夫は死んでしまいました。頼みとしていた二人の子どもが、借金のカタにとられようとしています。神を信じていたのに、どうしてこんな目にあわなければならないのか。なぜ信仰者は苦しみにあっていくのか。誰もが疑問に思うことだと思いますが、このことを疑問の一つ目とします。

2) その2：なぜ借金は棒引きにならず、子どもが取られるのか

次に二つ目の疑問に移ります。2節を読みます。「エリシャは彼女に言った。『何をしてあげようか。私に話しなさい。あなたには、家の中に何かあるのか。』彼女は答えた。『はしためには、家の中に何もありません。ただ、油の壺一つしかありません。』」

借金を返すために、家財道具を全部売り払い、いまは家の中には油の壺一つしか残っていません。こういう場合、今なら、「個人再生」とか「自己破産」という法律があつて、負債の額を減らすとか、負債を棒引きにするとかして、生きていけるようなシステムがあります。では、エリシャの時代はそうではありません。レビ記25章39節にこうあります。「もし、あなたのもとにいるあなたの兄弟が落ちぶれて、あなたに身売りしても、彼を奴隷として仕えさせてはならない。」

ひとことで言えば、借金が払えなければ、たとえ子どもでも連れて行かれてもしょうがない。どんなに困っていても借金は棒引きにならない。そう言っています。

これを聞いて、驚かない人はいないでしょう。「聖書は大昔の書物なので、時代遅れの考え方ができないのだ。」そんなふうに批判したくなります。本当にそうでしょうか。話しはさかさまではないでしょうか。

例えば、親が小さな子どもとかけっこをするとき、どうしますか。親は子どもが走れる速度に合わせて。大人の速さで走る親はいない。神も同じです。私たちが走れるスピードに合わせて走ります。この場合もそうです。神ご自身も、子どもが売られていくことなど、あってはならないことだということはよくわかっています。しかし、いきなり理想論を語ってもついていけないことだっている。そういうとき、神は人の歩く速さに合わせて、少しずつ理想に向けて神の国を打ち立てていく。そう考えることができます。

しかしそれでも疑問は解消しません。なぜ借金の棒引きをしないのか。なぜ子どもが売られることを禁止しなかったのか。そのことを疑問の二つ目とします。

3) その3：油はどこから与えられたのか

次に三つ目の疑問に移ります。この家で起きた奇蹟について見ていきます。やもめは、わずかな油が入っている壺が一つしか持っていませんでした。ところが、近所から借りてきた壺に注いでみたら、全部一杯になっていく。そのようにして与えられた油を売って、負債を返しなさい。それでも、子どもたちを養っていくのにも十分間に合うほどの油が手もとに残ったという話しです。

ずばり言いますが、この油はいったいどこから出てきたのでしょうか。神がなさることだから私たちの理性では理解できない。そう言って片付けていいのでしょうか。油がどこから出てきたのか、そこにこだわりたいと思います。これを疑問の三つ目とします。

3 神

1) 神の正しさ

今挙げた三つの疑問を考えていく前に、神はどのような方なのかを確認しておきます。ひとことと言えば、神は信じられる方なのか、そうでないのか、ということです。そのためには、神がどのような方かを知るのが一番はよい。そこでモーセの律法の後半に書かれているところを読みます。

「あなたの父と母を敬え。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。あなたの隣

人について、偽りの証言をしてはならない。あなたの隣人の家を欲してはならない。」

これが神の正しさの基準だということです。今読みましたが、どこかおかしいですか。いや、むしろ非常にまっとうですよ。

2) 人間の罪

神は信じられないと簡単に言いいますが、では人間のほうはどうでしょうか。人間は信じられるのでしょうか。他人のことより、まず自分を振り返ります。胸に手を当てて自分のことを考えてみてください。口では、人殺しはいけないと言いながら、憎い人がいると心の中で死ぬことを願っていませんでしたか。嘘をついてはいけないと言いながら、自分の都合が悪くなると事実を隠したり、ねじ曲げてしまう。こういうことをやっていませんでしたか。

神の正しさの基準からはずれていることを「罪」と言います。そうしますと私たちは罪人ということになる。神はこのような罪人をどうするのでしょうか。普通なら見捨てて終わりです。ところが、神は私たちを見捨てません。あきらめないうで、ずっと関わろうとする。聖書に出て来る奇蹟のことも不思議かもしれませんが、ここまで忍耐して罪人に関わろうとされる神ののほうがよく不思議で謎ではないですか。

そのことを確認してから、先ほど上げました三つの疑問について考えていきます。

4 神のみこころ

1) 主のことばは真実

まず一つ目の疑問について考えます。なぜ信仰者が理不尽な苦しみにあわなければならないのでしょうか。神がそこまで私たちのことを心配してくださるというのなら、なおさら疑問です。

今日の箇所と似たような内容をどこかで前に読んだことがある。そう思った方がいると思います。そのとおりで、実は列王記第一17章にてできま。そこにこの疑問を考えるヒントがありますので見てみます。エリヤの時代のことですが、ひどい飢饉が起きました。そのとき食べ物なくなり、いまにも死のうとしているやもめとその一人息子がいたのですが、エリヤが奇蹟によって救います。それでやもめと子どもは助かりました。ところがその子どもがこのあと病気が亡くなってしまいます。エリヤは、やはり奇蹟によってこの子どもを助けるわけですが、この一連の出来事を振り返って、このやもめは最後にこう告白します。列王記第一17

章24節です。「今、私はあなたが神の人であり、あなたの口にある主のことばが真実であることを知りました。」

信仰を持つ者が、どうして苦しみにあうのか。分からないことはたくさんあります。けれども分かることが一つある。試練にあうことは無駄ではない。私たちは、試練を通して、主のことばが真実であることを知り、神に近づけられていく。そのことが私たちにとって最も幸せなことなのだと思います。

2) 神の子が売られる

次に二つ目の疑問を考えます。借金のカタに子どもが連れて行かれることを、どうして聖書は禁止しなかったのか。借金を払えないというのなら、どうして借金を棒引きするような救済制度を設けなかったのか。

先ほどは、私たちの歩く速度に合わせるために、あえて禁止しなかったと言いました。理由はそれだけではありません。先ほど私たちは神の正しさに照らし合わせれば、全員が罪を犯していると言いました。その罪を赦していただくためには、莫大な賠償金を払わなければならない。しかし誰も払えません。もしここで借金の棒引き制度があったらどうなるか。私たちはこう言うでしょう。「どうせ神は棒引きにしてくれるから、このまま罪を犯しても大丈夫だ。」私たちはどこまでもねじ曲がっていますから、こんなことを言いながら、罪の深刻さを自覚しないで逃げ回っていたでしょう。だから借金の棒引きを認めないのです。

しかしそれでは誰も罪が赦されないまま、さばかれて終わりになります。そこで神は考えました。罪人である私たちが赦されるために、私たちがさばくのではなく、ご自分のひとり子をさばく。そのような救いの道を用意されました。それが十字架です。私たちが払えなくなっていた借金を、この方が身代わりになって払ってくださったわけです。神のひとり子である方が私たちの借金を払うために、カタに取られた。そういうことになります。神が借金の棒引きをしなかった理由、子どもが売られることをあえて禁止しなかったのは、そのためだったということになります。

そもそも、神のひとり子が売られるように仕向けたのは誰でしょうか。私たちです。神は子どもの人権を無視しているとか、聖書は時代遅れだと言う前に、私たちがいかにひどいことをしてきたのか、まずそのことを思い返さなければなりません。

3) ご自分のからだを分け与える

最後に三つ目の疑問です。いま見てきたとおりに、ここで起きていることがすべて神の救いに関係がありました。であるなら、油はどこから与えられたことになるでしょうか。

ここを単なる奇跡として片付けてはなりません。神の子が十字架で裂かれたからだは、私たちのいのちのパンとなったと聖書にあります。家中にあふれるほどの油によってこの家族が救われたのなら、この油は救い主のからだを象徴しているのではないですか。神はご自分のからだを裂いて、この家族を救ってくださっていた。私たちがいただいている救いがこれだったのです。ここにも主の十字架が輝いています。

私たちをどこまでも愛して下さる神の恵みに感謝したいと願います。